

甲状腺外科草子 72

清少納言の系譜：清原元輔

杉野 圭三

清少納言の父、清原元輔は著名な歌人であった。清少納言が宮中で歌を詠めと言われ、「父の名を辱めたくないで歌は詠まない」といって許された話がある。またその続きとして、中宮定子から歌会に参加するように「元輔が後と言はるる君しもや今宵の歌に外れては居る」との歌が清少納言に贈られ、その返しが「其の人の後と言われぬ身なりせば今宵の歌は先づぞ詠ままし、慎む事、候はずは、千歌（ちうた）なりとも、此よりぞ、出で参で来ましと、啓しつ」（元輔の娘と言われない身であれば千首でもよみたいものです、枕草子 105 段）とある。



清少納言

元輔

元輔集（宮内庁書陵部蔵）

清原元輔（きよはらのもとすけ）：908－990，清原深養父の孫、清原春光の子。官位は従五位上・肥後守。三十六歌仙。天曆 5 年（951 年）に勅撰和歌集撰集の命により、撰和歌所寄人に任ぜられ、梨壺の五人の一人として『万葉集』の訓読作業や『後撰和歌集』の編纂に当たった。拾遺和歌集に 48 首、後拾遺和歌集に 26 首、新古今和歌集に六首採択。家集に『元輔集』があり、実数は 510 首と考えられる。儀礼の具として製作した和歌が多く、即吟したと言われている。

ちぎりきな かたみに袖を しぼりつつ
末の松山 浪こさじとは（小倉百人一首 42 番）

安和 2 年（969 年）62 歳にして従五位下・河内権守に叙任され、974 年周防守に任ぜられ受領となる。986 年に 79 歳で肥後守に任ぜ

られ、再び受領として九州に赴く。清原家の家庭経済が裕福でなかったものと考えられる。

枕草子第 22 段は面白いことで有名である。

妻まじき物：昼、吠ゆる犬。春の網代。
三月、四月の紅梅の夜。中略、除目に官得ぬ人の家。

官位昇進が得られない不遇が描かれ、恐らく清原家の実写であろう。

永祚 2 年（990 年）6 月、卒去、享年 83。
清原神社（熊本市）に祀られている。

面白い逸話も残っている。

歌讀元輔、賀茂の祭りに一条の大路を渡りし語（今昔物語本朝世俗部第二十八卷第六）

今は昔、清原元輔とい云ふ歌讀ありけり。

要約すると、元輔が賀茂祭の奉幣使を務めた際に落馬、冠が滑り落ち禿げ頭が露出した話。世慣れた人物で、物事を面白く言って人を笑わせる老人だったと語り継がれている。

過去の歌を基にした技巧的な歌が多く、祖父の深養父のような独創性や斬新さに欠けると感じるのは私だけであろうか？元輔には珍しく、本音が窺われる恋の秀歌を挙げる。

にほふらむ霞の内の桜花思ひやりても惜しき春かな（新古今和歌集 1016 番）

（詞書に「女をもの越しにほのかに見てつかはしける」とある。女とは歌人中務の娘!!）

うつり香の うすくなりゆく たき物のくゆる思ひに きえぬべきかな（後拾遺 756）

（あなたの移り香が薄くなってゆくように、恋い焦がれる思いも消えそうです）

百人一首に採択された技巧を凝らしたものより、これらの歌が個人的には好きである。歌人としてよりも、編集者・批評家としての才能があった人物かもしれない。

参考資料：清少納言（岸上慎二）、新版百人一首（島津忠夫）、枕草子（島内裕子校訂・訳）、今昔物語集（角川文庫）、後拾遺和歌集（岩波文庫）、Wikipedia

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2023 年 8 月 17 日